

公益社団法人日本語教育学会 文部科学省委託事業

「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」2018

モデルプログラム②「教育コミュニティのデザイン」に関する資料

## 多文化共生の拠点としての学校

浜田麻里（京都教育大学）

### 1. 教育コミュニティの核としての学校

- ・学校は多文化共生の拠点。

**参考：**国連「児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）」第29条

締約国は、児童の教育が次のことを指向すべきことに同意する。（中略）

児童の父母、児童の文化的同一性、言語及び価値観、児童の居住国及び出身国の国民的価値観並びに自己の文明と異なる文明に対する尊重を育成すること。

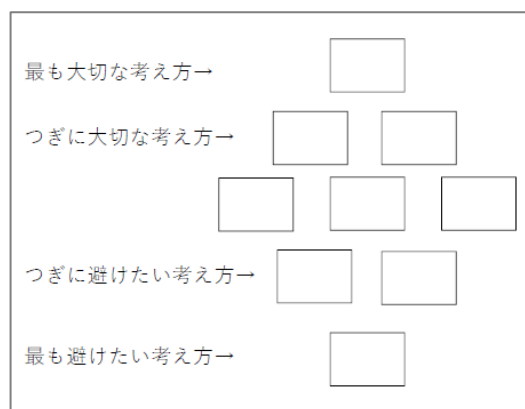
- ・校内で児童生徒の母語・母文化に関する権利について、理解を深める。
- ・多文化共生の教育について、教員間で議論し、一定方針の下に取り組みを進める。

### 2. 活動

<目的>活動を通して、各教職員が生徒の母語・母文化に関する考え方を意識化し、教員間で方向性を議論するためのきっかけとする。

<手順>

- (1) 4名程度のグループに分かれる。
- (2) 次ページをグループの数の枚数、印刷して、線に沿って切り取り、9枚1組にして、1グループ1組配布する。
- (3) グループで話し合っ、9つの考え方にランクをつける。最終的に、右の図のようにカードをダイヤモンド型に並べる。（15分程度）
- (4) 各グループのランキングを発表する。
- (5) ランキングを話し合いながら感じたことや他のグループのランキングから気付いたことを全体で話し合う。



<p>①日本で暮らしていくのだから、日本人としての感性を身に付けるべきだ。</p>	<p>②ルーツの名前を名乗るようにすべきだ。</p>
<p>③寝た子を起こすことになるので、外国にルーツがあることには触れない。</p>	<p>④ルーツの文化を家庭でしっかり身に付けさせてほしい。</p>
<p>⑤アイデンティティについては教師が干渉せず、自然の成り行きにまかせる。</p>	<p>⑥精神的に安定するので、どちらか一つのルーツを選んだ方が幸せだ。</p>
<p>⑦日本以外のルーツの文化も学校教育で学べるようにするのがよい。</p>	<p>⑧アイデンティティについて考えられるよう、様々な機会を作る。</p>
<p>⑨ルーツの文化を学べる場を地域などに作った方がよい。</p>	